

宇都宮の石造建造物



宇都宮市教育委員会

表 紙

市指定文化財

『旧篠原家住宅』

(平成7年11月27日指定)

宇都宮市今泉1丁目4-33

文化財シリーズ第15号

宇都宮の石造建造物

平成9年3月
宇都宮教育委員会

序 文

まちにはそれぞれの気候や風土によって生まれた建造物があります。宇都宮市においても、特産の大谷石などを使った石造建造物が数多く見られ、これが本市の個性となっています。

宇都宮の風景にすっかりとけ込んでいる大谷石などを用いた石造建造物は、宇都宮で生活する人々にはごく普通の風景で、石蔵は郊外に行けばあちらこちらで見ることができます。郊外に比べ数こそ少ないですが、市中心部にも石蔵は現存しており、その姿は古き商都宇都宮を偲ばせます。しかし、この見慣れた風景が全国的に見て、宇都宮独特のものと気づく人は、意外と少ないかもしれません。

平成7年には旧篠原家住宅の主屋と3棟の石蔵とが市の文化財に指定され、近年、宇都宮の石造建造物が注目されています。

本市教育委員会では現存する石造建造物の調査を行い、その成果をみなさんに紹介しようと本冊子を編集しました。この冊子が皆様が「宇都宮の石造建造物」を理解する上での手助けになれば幸いに思います。

最後になりましたが、現地に赴き調査して下さった調査員の方々、聞き取りにご協力下さった方々に厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

宇都宮市教育委員会

教育長 大塚一之

目 次

序 文

まえがき

I	「宇都宮の石造建造物」の調査について	1
II	「宇都宮の石造建造物」の歴史	2
III	代表的な石造建造物	4
	・旧篠原家住宅	4
	・日本聖公会宇都宮聖ヨハネ教会礼拝堂	7
	・カトリック松が峰教会礼拝堂	8
	・小野口家住宅の石造建造物群	9
	・大谷公会堂	10
IV	市内所在の石蔵	11
	・一条地区	
	・旭地区	
	・陽南地区	
	・陽東地区	
	・陽西地区	
	・宮の原地区	
	・平石地区	
	・清原地区	
	・瑞穂野地区	
	・豊郷地区	
	・国本地区	
	・城山地区	
	・富屋地区	
	・篠井地区	
	・姿川地区	
	・雀宮地区	
V	市内所在の石造主屋	48
	・陽東地区	
	・国本地区	
	・富屋地区	
	・姿川地区	
VI	市内所在の石造門	50
	・陽東地区	
	・宮の原地区	
	・平石地区	
	・清原地区	
	・国本地区	
	・城山地区	
	・富屋地区	
	・姿川地区	

あとがき

まえがき

本冊子は、平成7年度に宇都宮市教育委員会が市文化財保護審議委員会の答申を受け、市文化財調査員活動の一環として実施した、「石造建造物調査」の結果をもとにまとめたものです。

同調査は市内全域を対象として実施されました。本冊子はこれをもとに事務局（市教育委員会文化課）の職員が追加調査を行い、編集にあたりました。

本冊子は、多くの方々に実生活にとけ込んでいる石造建造物を、できるだけ多く紹介することを第一の目的として編集しました。そこで、専門的な記述は極力避け、現状の写真を中心に掲載しました。

なお、この「石造建造物調査」は以下の組織で調査をしました。現地調査において多くの方々のご協力を仰ぎましたこと、心からお礼を申し上げます。

●宇都宮市文化財保護審議委員（平成7年度）

渡辺 安友（委員） 富 祐次（副委員長） 塙 静夫（委員長） 大金 宣亮（委員）
橋本 澄朗（委員） 阿部 昭（委員） 柏村 祐司（委員） 大嶽 浩良（委員）
森谷 憲（委員） 小林 幹夫（委員）

●宇都宮市文化財調査員【（ ）内は調査員の担当地区】（平成7年度）

河合 芳幸（一条） 塚田 宗雄（陽北） 酒井 光一（旭） 安野弥一郎（陽南）
上野とも子（陽西） 高藤 常松（星が丘） 清水 昭（陽東） 小林 哲夫（泉が丘）
糸川 弘明（鶴田） 菊池 正仁（平石） 坂本恒一郎（清原） 木嶋 宏（横川）
坂寄 悦男（瑞穂野） 平塚 良雄（豊郷） 小塚 博（国本） 阿部 昭（城山）
福田 操（富屋） 阿久津義正（篠井） 絵面 昭男（姿川） 小島豪市郎（雀宮）

●宇都宮市教育委員会文化課文化財保護係職員（平成7年度）

横堀 杉生（文化課長） 手塚 英男（文化財保護係長） 梁木 誠（指導主事）
小松 俊雄（指導主事） 大塚 雅之（指導主事） 富川 努（指導主事）
神野 安伸（指導主事） 今平 利幸（指導主事）

1 『宇都宮の石造建造物』の調査について

本冊子は宇都宮市文化財調査員活動の一環として実施した「平成7年度課題別一斉調査」のテーマ『宇都宮の石造建造物』の結果をもとに、その後、文化課職員が追加調査したものをまとめたものです。

1 目的

宇都宮市内には市の特産品となっている大谷石を用いた建造物が、現在でも多く見受けられることができます。しかしながら、建造物に用いた大谷石自体の寿命や人々の社会生活の変化によって、大谷石の建造物が徐々に消滅しているのも事実です。そこで、市内にある大谷石を用いた建造物の悉皆調査を実施し、記録に残すことを目的としました。

2 調査対象

『石造建造物』の調査対象は以下の基準を設けて行いました。

- ・第二次世界大戦以前に建造されたもの
 - ・大谷石等を用いた主屋・石蔵（灰小屋・味噌蔵等小規模なものは除く）・教会・倉庫等の建造物
 - ・大谷石等を屋根・腰壁（張石・積石）等に用いた建造物（神社・寺院・門等の建造物も含む）
- なお、石蔵に関しては報告数が多く、ページ数の都合上本冊子では、明治初期（明治15年）以前に建造されたもののみ掲載とさせていただきます。

3 調査方法

(1) 調査

調査は直接現地に行って聞き取り調査を中心に行いました。なおそれと平行して写真撮影やスケッチ、計測なども行いました。

(2) まとめ

『石造建造物調査票』に調査結果を記録し、写真やスケッチを添付しました。

(3) 調査地区

調査地区は宇都宮市全域で行いましたが、各調査員は原則として担当地区内の調査を行いました。

4 調査結果

調査員からは661件の調査票が提出され、この内石蔵は583件と大部分をしめています。文書・棟札や梁などへの墨書で建築年号が判明した石蔵は242棟で、これらを屋根の材質（大谷石などを加工した『石屋根』と『瓦屋根』）、壁の形態（薄く削った大谷石などを釘で張り付けた『張石壁』と、五十石〔15cm×30cm×90cm〕を積み上げていく『積石壁』）とに分類して考察した結果、大正時代に石屋根が減り瓦屋根が増えています。同様に壁についても張石壁から積石壁へと大正時代が変わってきているという、おおまかな傾向をつかむことができ、その他口伝で年号を確認したものについても、おおよそ同じ傾向であることが確認できました。

今回この結果に事務局の調査を加えて本冊子にまとめました。これら石造建造物のほとんどが個人所有となっておりますので、見学される場合は、所有者の許可を受けるようにしてください。

II 宇都宮の石造建造物の歴史

宇都宮市内には、大谷石などの凝灰岩を用いた建造物が多くあります。この凝灰岩は東西に約8km、南北に約3.7kmにわたり埋蔵され、宇都宮市内では、中心部から北西約7kmに位置する大谷町を中心にこの石を産出しています。また、産出地により田下石・桜田石などと様々な名前でも呼ばれ、それぞれに色合いなど多少の違いがあります。また、石材としての特徴は、耐震・耐火・耐久性に富み、石質が柔らかいため加工が自在ということがあげられます。

大谷石などの凝灰岩が建造物に使用された歴史をたどると、古墳時代までさかのぼります。姿川・田川流域には、7世紀代に造られたいくつかの古墳に、凝灰岩を組み合わせた横穴式石室（埋葬施設）が見られます。また、江戸時代の本多正純による宇都宮城改修の際にも、田野町から採取した大谷石が使われたと言われ、江戸時代後半には二荒山神社の石垣修理にも使われたとも言われています。

江戸時代前期には農間渡世（農民が農業の合間に行う営業・稼業）の形態で、商品としての切出しと販売とが行われていました。特に18世紀後半以降は、貨幣経済の発展とともに盛んに行われるようになりました。明治7年の「建築石取調」には、明治時代以前に、大谷石が石井河岸から鬼怒川の舟運を利用し、江戸に出荷されていたことが記されています。

明治時代にはいると、東京をはじめとして関東一円に販売網が広がりました。大谷石の名前を全国に広めた建造物として、大正11年建設の旧帝国ホテル（愛知県犬山市明治村に中央玄関を保存）が挙げられます。大谷石を使用したこの建造物は、大正12年9月の関東大震災において焼け残り、大谷石の耐火性・耐震性が全国に知れわたりました。

一方、市内に造られた代表的な石造建造物では、大正末期～昭和初期頃の大谷公会堂（市内大谷町に現存）、昭和3年の宇都宮商工会議所（市内中央公園に一部保存）、昭和7年



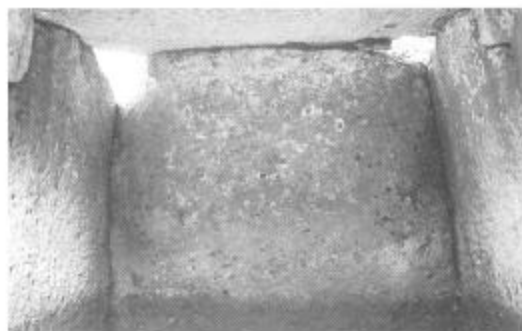
「石の里」大谷



大谷石の採掘跡



十里木古墳石室（天井石）



十里木古墳石室（奥壁）

のカトリック松が峰教会礼拝堂（市内松が峰1丁目に現存）、昭和8年の日本聖公会宇都宮聖ヨハネ教会礼拝堂（市内桜2丁目に現存）昭和10年の栃木県教育会館（昭和55年に解体）などがあげられます。

民家における石造建造物に目を向けますと、第二次世界大戦以前に造られた石蔵は、明治・大正時代の上層農家の富の象徴として建てられたものでした。戦後、農地改革や農作業の機械化に伴い生産力が増し、多くの農家の地位が向上すると、これら農家が富の象徴として石蔵を建て、農業設備を充実させるために、納屋等の石蔵以外の付属建築物も増加し、主屋などにも使用されるようになりました。

石蔵における石の使い方では、戦前は張石様式（外壁に化粧材として板状の石を張る）が中心でした。この様式には縦張りとは横張りとはありますが、縦張りの方が古くからある様式です。戦後になると、積石様式（石をブロック状に積み上げて壁を構成する）が中心となってきます。この変化は、主に輸送手段に関係しています。明治時代の中心的な輸送手段は馬であり、運べる石の大きさや量は限られていました。ところが戦後、トラックなどの交通手段の発達で、大きな石を大量に運ぶことを可能にし、積石様式が普及したのです。屋根の形態にも年代的变化があり、戦前は石屋根（石を瓦のような形に加工したもの）が多く、戦後になると現在多く見られる瓦屋根に変化してきました。しかし、石屋根は最近、瓦屋根やトタン屋根に改修されたものも多く、現在、屋根の材料だけでは一概に年代を判定できません。

以上、簡単に宇都宮の石造建造物の歴史を紹介しましたが、これが本編をご覧になる際にお役に立てば幸いです。



二荒山神社の石垣



「弘化三年」の銘（二荒山神社）



宇都宮商工会議所の玄関

Ⅲ 市内の代表的な石造建造物

○旧篠原家住宅

主 屋 石蔵Ⅰ 石蔵Ⅱ 石蔵Ⅲ（宇都宮市指定文化財）平成7年11月27日指定

所在地 今泉1丁目4-33【旭地区】

所有者 宇都宮市

・主 屋



「旧篠原家住宅」主屋 石蔵Ⅰ

年 代 明治28年（1893）梁の墨書による

規 模 総床面積：331.24㎡（1階172.24㎡ 2階159.00㎡）

2階建 1階大谷石張石壁 瓦葺屋根

篠原家は戦前までは醤油醸造や肥料の販売を営む、宇都宮では有力な商家の一つでした。この主屋は、店部分と住居部分とが一体化されているため、1・2階併せて100坪という大規模なものとなっています。外観は黒漆喰を用いるとともに、腰までの部分を大谷石を張って外壁とし、目地を壁と同じ黒漆喰の海鼠仕上げとしています。45cm角のケヤキの大黒柱や2階座敷の4.5m幅の床の間など、簡素ながら良い材料をふんだんに用いた豪勢な建物となっています。また、店先の格子も堂々たる風格を形作るのに大きな役割を果たしています。



旧篠原家住宅敷地平面図



帳場

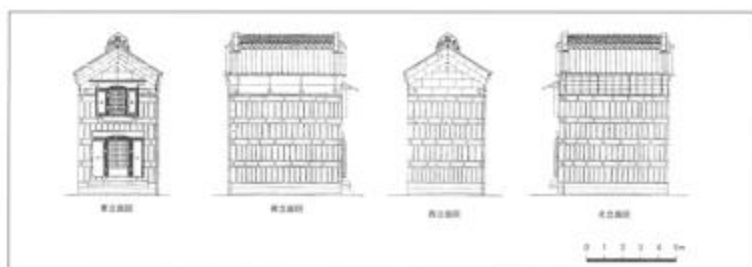


座敷

・石蔵Ⅰ

年代 明治28年（1893）梁の墨書による

規模 延床面積39.64㎡ 2階建 全面大谷石張石壁 瓦葺屋根



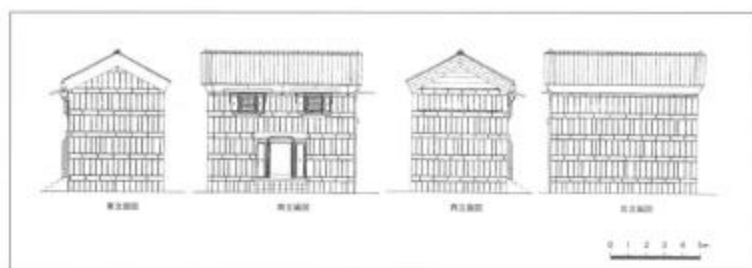
石蔵Ⅰ立面図

石蔵Ⅰは新蔵と呼ばれ、主屋と同じ年に造られました。もとは主屋と廊下でつながり、部屋感覚で出入りできました。壁は大谷石の張壁で、目地や入り口の扉は主屋と同じ黒漆喰の仕上げです。なお、内部の壁は全面鉄板が張られています。これは後に防犯のため付けられたものです。



鬼瓦

・石蔵Ⅱ



石蔵Ⅱ立面図

年代 嘉永4年(1851) 梁の墨書による

規模 延床面積70.14㎡ 2階建 全面大谷石張石壁 瓦葺屋根

石蔵Ⅱは文庫蔵と呼ばれ、1階には日用品を、2階には書籍や美術品・着物を中心に納めており、日常使いの蔵であった事が分かります。壁は石蔵Ⅰと同じく大谷石の貼石を用いた黒漆喰仕上げです。

2階の梁には「篠原友右衛門安親建立 大工棟梁留吉」と墨で書かれています。



着物を入れておいたタンス

・石蔵Ⅲ

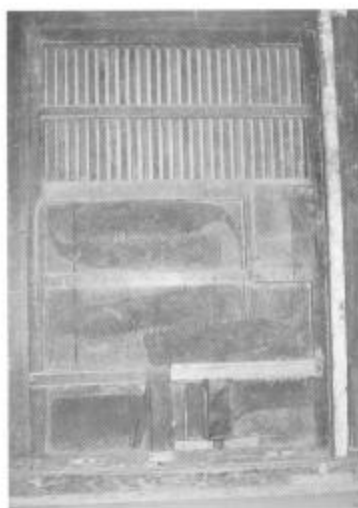
年代 石蔵Ⅱとほぼ同時期

規模 延床面積41.18㎡ 2階建 1階大谷石張石壁 瓦葺屋根



石蔵Ⅲ立面図

この蔵は、もともと篠原家で醤油を醸造していたときの道具などを入れておいた蔵です。建築時は2階建でしたが、第二次世界大戦後、2階の床が取り払われてしまい、現在は吹き抜けとなっています。石蔵Ⅰ・Ⅱの窓と入口が開き戸なのに対し、石蔵Ⅲでは引き戸になっています。この引き戸の裏側には、装飾と防犯を兼ねたと思われる大鋸が打ち付けてあります。この蔵も大谷石の張石を1階部分の壁に用いていますが、2階の壁と目地の海鼠は白漆喰仕上げです。



扉の裏側の^{おまが}大鋸

○日本聖公会宇都宮聖ヨハネ教会礼拝堂



日本聖公会宇都宮聖ヨハネ教会礼拝堂

竣工年 昭和8年(1933)

所在地 桜2丁目3番27号【陽西地区】

所有者 日本聖公会北関東教区

規模 延床面積208.27㎡(1階194.06㎡ 2階14.21㎡)

平屋建(塔部2階建)鉄筋コンクリート造 全面大谷石張石壁 銅板葺屋根

静かな住宅地の中にある愛隣幼稚園の敷地内に、素朴な大谷石の外観を持つ教会堂があります。聖公会の教会らしく質素なたたずまいを見せていますが、長方形の礼拝堂に四角い鐘塔を付けたものとなっており、やや重い印象があります。しかし、それを大谷石の質感が和らげ、全体として安定感のある建物となっています。

大谷石の外観とは一転して、内部は曲げた木の梁を見せています。これはさながら、逆さになった船底のような印象を与えますが、全体としてはリズムカルで軽い印象ながら、気品のある空間となっています。窓や扉の建具なども献堂当時のものがそのまま残り、それ自体が貴重なものとなっています。



礼拝堂内



鐘塔

○カトリック松が峰教会礼拝堂

竣工年 昭和7年（1932）

所在地 松が峰1丁目1-5

【旭地区】

所有者 カトリック浦和教区

規模 延床面積953.77㎡
（建築面積404.2㎡）
4階建鐘楼付き（塔）
銅板葺屋根



カトリック松が峰教会礼拝堂

現在日本に残る最大の大谷石建造物であるこの教会は、教会建築においても北関東で屈指の規模を誇ります。鉄筋コンクリートの躯体に大谷石を張った教会堂は、2本の尖塔を正面に持つ本格的なロマネスク様式となっています。

大正時代、フランス人のカジャック神父が抱いていた献堂の志を、弟子であったフロジャック神父が引き継ぎ、昭和7年11月に献堂しました。設計者はスイス人のM x、ヒンデルで、国内に多くの教会関係の建造物を残すとともに、「北海道の近代建築の開拓者」といわれていました。

建築当初は1階を幼稚園としていましたが、現在はホールとして利用しています。2階は礼拝堂で、もとは畳敷きでしたが、宇都宮空襲で被災して屋根及び2階の床を消失したため、戦後の再建で床張りとなされました。3階から上は尖塔部分で、3階は聖歌隊席、4階は鐘楼で戦時中の金属回収で失われたアンジェラスの鐘が、昭和57年に再現されて美しい音色を響かせています。



大谷石で装飾した礼拝堂内の柱



アンジェラスの鐘

